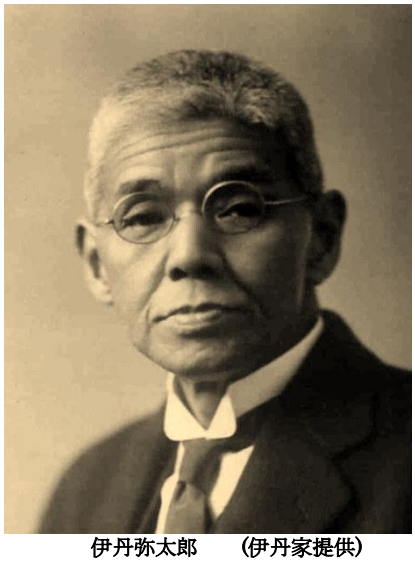
考察　佐賀財閥と呼ばれた実業家

伊丹弥太郎と伊丹文右衛門



伊丹弥太郎　　（伊丹家提供）

伊丹文右衛門　　（伊丹家提供）

浄土真宗西本願寺門徒に始まる

西日本鉄道の源流

九州電力への継承

そして仁比山別邸九年庵は残った

平成 27 年 6 月

特定非営利活動法人　みなくるＳＡＧＡ

本間　雄治

ＩＮＤＥＸ

第１章　肥前佐賀城下、本庄町の伊丹家

第１節　江戸時代から続く伊丹家の家系図

第２節　伊丹文右衛門は明治期の佐賀近代インフラの先駆者

第３節　土木請負業「振業社」と仁比山別邸の謎

第２章　伊丹弥太郎と他の実業家達との共同事業

第１節　伊丹弥太郎の前期事業展開　　明治 39 年以前

第２節　伊丹弥太郎の後期事業展開　　明治 39 年以後

第３節　伊丹弥太郎の大正期事業展開　　大正から昭和

終章

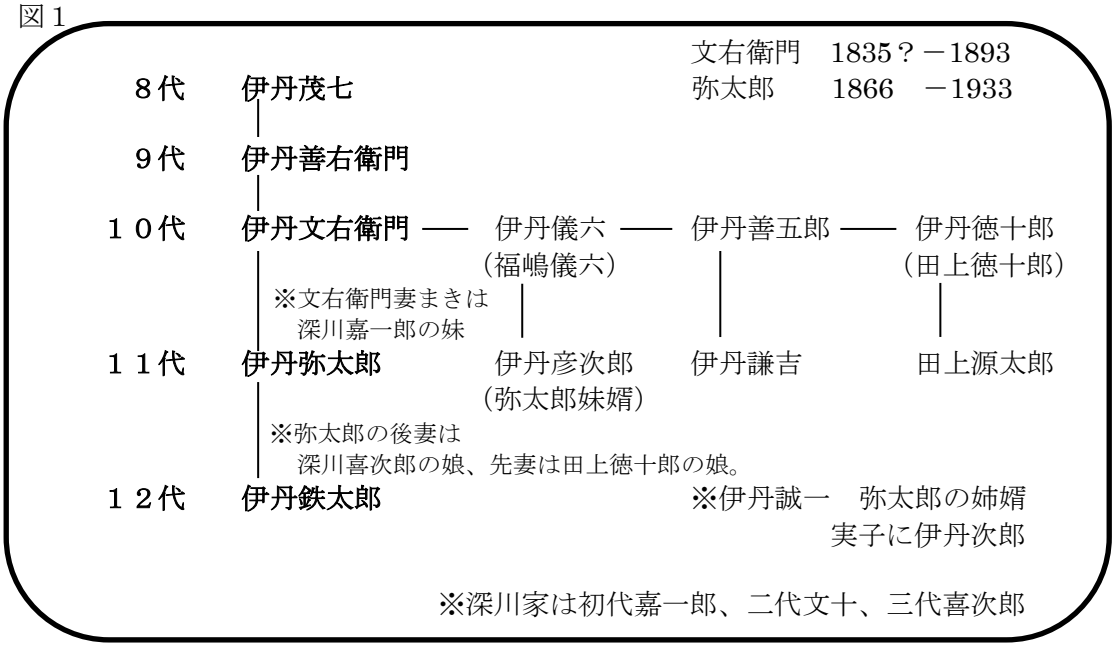
佐賀財閥の祖「伊丹文右衛門」と
西日本鉄道・九州電力創成期、一つの源流「伊丹弥太郎」

第１章　肥前佐賀城下、本庄町の伊丹家

本庄町は道祖元町とともに佐賀城下の西に位置し本庄川の船溜まりの位置にある。明治、大正の地方財閥と呼ばれた佐賀伊丹家、深川家、古賀家の御三家の中、伊丹家について記述していく。深川家については「久留米大学経済社会研究所紀要」第４輯に寄稿した「筑後川下流の近代化産業遺産群探査と考察」(2014 年 3 月刊)に詳しく記述しているので、参考にされたい。
また、本論ではもう一つの御三家古賀家についても若干、記述していく。

第１節　江戸時代から続く伊丹家の家系図　　佐賀鍋島藩御用達

図１



伊丹一族は佐賀藩鍋島家の出自、山城国長岡一族と共に近畿より移住の可能性が高く、摂津の伊丹が出身地ではと筆者は推測している。明治期の伊丹文右衛門、弥太郎親子の足跡に関西との関わりが非常に色濃く感じられる。この件の論証は後述する。（長岡氏が肥前鍋島荘に居住し鍋島氏と名乗る。）

第２節　伊丹文右衛門は明治期の佐賀近代インフラの先駆者

伊丹文衛門の生誕年は未だ確認が取れていないが、没年は明治 26 年（1893 年）である。佐賀の近代史では文右衛門の評価が低いと思うが彼こそ幕末から明治にかけての佐賀地方の近代インフラに大きく貢献をした実業家と考察する。
筆者は伊丹文右衛門の調査をする中でキーワードを得た、それは「浄土真宗西本願寺」であり、前述した御三家は全て同じ宗派である。菩提寺、深川・古賀家は佐賀城下呉服町「願正寺」、伊丹家は佐賀城下道祖元町「専修寺」である。

専修寺の現住職菊池氏のご母堂（先代住職の奥様）に面談し伊丹家由来の歴史的資料について聴取したところ、全く残存していないとのことであった。
唯一の伝承の中に「重要な事実」があった、それは西本願寺本山の直参門徒であり九州地区１名の「本山勘定役（財務担当）」という事実である。親子共に本山参りを深川家・深川汽船で頻繁に往復したであろう。
勿論、この役職は文右衛門没後に弥太郎に継承される。この文右衛門の判明した足跡を年譜として記述すると、以下のとおりとなる。

表１

明治	項目	備考
12 年	・佐賀第百六国立銀行設立　参画	鍋島家中心に発起人２６名の一人
15 年	・私立栄銀行設立　点合町本店（5 月開業） 文右衛門頭取就任	伊万里銀行に続き 2 番目 資本金 11 万円（3 月開業）
16 年	・専修寺本堂　一建立	
17 年	・栄銀行諸富出張店開設 東川副村諸富津１８ ・佐賀新聞発刊　出資株主	現・味の素九州事業所南角 古賀銀行は 18 年設立 対岸大川若津に 19 年 若津出張店開設
20 年	・本店与賀町 81 番地に移転 ・土木請負業振業社設立　与賀町 鉄道局から工部大卒技師菅原恒覧招聘 ・九州鉄道設立　後に国有化 佐賀出張所栄銀行本店内	旧清和高校跡 振業社社長　田上徳十郎 資本金 10 万円（8 月開業）
21 年	・九州鉄道　取締役就任	区別する為、初代とする
22 年	・佐賀市成立　本店番地変更 与賀町 112 番地 ・第一回佐賀市会議員	振業社は鉄道敷設請負、 筑後川改修工事請負
24 年	・九州鉄道　佐賀駅開業 ・振業社　廃業	現在地と白山町土橋の地 に駅舎は２案候補
25 年	・神埼仁比山別邸完成	弥太郎佐賀県農会幹事就任
26 年	・文右衛門　没 弥太郎栄銀行　二代目頭取就任	弥太郎家督相続

表２　肥前國佐賀市商工人名　　明治２３年９月現営業者　近代デジタルライブラリー

役職	氏名	職種	所在	備考
	伊丹善五郎	呉服和洋反物卸商	道祖元町	図１参照
	伊丹文右衛門	銅鉄板金鋳物商 并紡績綿糸販売	本庄町	
	田上徳十郎	米穀商	本庄町	図１参照
	深川嘉一郎	汽船回航客貨運輸業	道祖元町	図１参照
頭取	古賀善平	第七十二国立銀行	蓮池町	旧古賀銀行
頭取	伊丹文右衛門	無限責任　栄銀行	与賀町	
社長	田上徳十郎	有限責任　振業社	与賀町	

注 : 古賀銀行変遷では第七十二銀行を合併し佐賀銀行、その後古賀銀行と改称する。
注 : 古賀銀行頭取は古賀善平・末広扇平・初代古賀善兵衛・二代善兵衛と継承。

前述したように伊丹家と浄土真宗西本願寺本山は密接な関係があり有力門徒であった。その信仰心は伊丹家菩提寺専修寺の本堂建立であり、それについて興味深い伝承がある。明治 16 年に一建立は実行された。（一建立は一人の寄進による建立。）

・本堂一建立は寄進者に災いを招くとの風評があったが、あえて文右衛門は広く檀家の為であれば進んで寄進する、末代の災いは甘んじて受けようとの覚悟が語られた。
・建立の際、材料に佐賀郡神野村の黄檗宗の大興寺の余材を使用し、大変な基礎工事であった。　（前述の前住職奥様より平成 26 年聴取）

年代を追って調査研究により判別した足跡を記述する。

明治 15 年設立の栄銀行の本店の所在は現伊勢神社（佐賀市伊勢町）の隣接する南側点合町であるが詳細は不明である。今回の調査研究で非常に重要な人物の名前が浮びあがった、その人物とは摂津伊丹郷、第 11 代小西新右衛門である。400 有余年、現在も存続する「兵庫県伊丹市小西酒造」当主であり、彼も西本願寺直参門徒有力者であった。そこで、両者の事業を並列比較し記述していく。
同 15 年日本銀行の設立に関わり新右衛門は監事として就任する、肥前栄銀行と日本銀行は同年の設立となる。（日本銀行明治 15 年 10 月 10 日開業）

明治 17 年、栄銀行の唯一の支店として東川副村諸富津（現佐賀市諸富町諸富津）に出張所を開設するが、この店舗位置は江戸期の長崎街道境原宿（現神埼市千代田町原ノ町）を起点とする「蓮池往還（原ノ町～諸富寺井津間）」の諸富津入口にあたる。その頃は明治 18 年開通の県道諸富佐賀線も完成していなかったが明治期の第一期筑後川改修工事という大公共工事が予見される時勢であり、文右衛門は進出を決定したと推定する。
大正 5 年には内陸部の諸富支店は筑後川堰堤沿いの地、現在の料亭「津田屋」の地に移転する。大正 14 年に唐津銀行に栄銀行が吸収されるまで本店と諸富支店の 2 店舗のみで伊丹家は堅実に金融業を営んでいた。この栄銀行本店は現佐賀銀行与賀町支店、諸富支店は現佐賀銀行諸富支店へと 100 年以上の歴史を継承することとなる。

明治 19 年、伊丹の小西新右衛門らは私鉄山陽鉄道（後国鉄山陽本線）を設立するが同 20 年伊丹文右衛門も北部九州の各県の行政機関、著名実業家と九州鉄道の創設に参画する。この 20 年には「本店の与賀町移転」、「九州鉄道佐賀出張所」の本店構内設置、土木請負業「振業社」の設立と着々と社会資本の近代化に沿った事業を展開し繁忙の極みであった時期である。

明治 21 年に文右衛門は九州鉄道の取締役就任、明治 24 年は九州鉄道佐賀駅開業に至る。

第 3 節　土木請負業「振業社」と仁比山別邸の謎

文右衛門は明治 21 年九州鉄道の取締役に就任する、彼の推進した九州鉄道は明治 24 年鳥栖・佐賀間が開通し佐賀駅の開業となる。

この鉄道敷設の請負工事が振業社である。他に九州鉄道は日本土木会社が請負った。振業社は明治 20 年資本金 10 万円、社長は文右衛門の実弟田上徳十郎で創設される。当時の資本金 10 万円は佐賀県内の企業では破格の資本金であり伊丹一族の意気込みが感じられ、「明治 22 年に成立した佐賀市」、その表玄関が九州鉄道佐賀駅であり文右衛門の偉業として顕彰されるべきと筆者は考えている、特に佐賀市民にはこの事実を知らしめることも必要である。振業社は明治 20 年～24 年の短期 4 年の存続会社であった。伊丹家の当時の事業には近代的技術者の存在、並びに育成が見受けられない。
そこで江戸からの伝統的土木集団「黒鍬組」を関西より多く抱え、そのトップに鉄道局に入庁したての菅原恒覧を破格の給与 120 円で招聘したのである。恐らく菅原は九州鉄道請負工事、筑後川改修請負工事の技術的主柱、技師長として活躍したと推測する。技師見習いとして有賀定吉、米多比豊治が判明する。
ここで菅原恒覧の振業社入社の背景等を紹介する。（菅原の移籍は渡航資金造り）

「菅原恒覧」
・岩手県出身　1859～1940 年　1886（明治 19 年）工部大学校卒、鉄道局入局
1888 年（明治 21 年）佐賀振業社入社　古市公威斡旋
1892 年（明治 25 年）甲武鉄道入社
資料「近代日本土木人物事典　高橋祐・藤井肇男著 2013 年」
資料「日本鉄道請負業史明治編　中　土木工業協会編　1944 年」

「九年庵」
伊丹家仁比山別邸に関して少し記述したい。筆者はこの別邸は文右衛門が隠居の地として購入し明治 25 年竣工したと考察している。九州鉄道の佐賀駅開業、筑後川改修工事の第一期完工で現役引退を考えたと推察する。まだ伊丹家当主は文右衛門であり、彼は弥太郎への実権継承を始めようとしていたが、残念なことに翌 26 年文右衛門は永眠する。後にこの別邸に嫡男弥太郎が名勝「九年庵」を明治 33 年より築造する。
また、文右衛門の実弟福嶋儀六は仁比山在住、文右衛門妻「まき」も仁比山から手紙を佐賀市長石丸勝一宛に出状している。
恐らく儀六が土地を兄文右衛門に紹介したと考察する。
資料「明治 27 年 5 月 4 日付　葉書　佐賀県立図書館所蔵」
資料「明治 29 年 5 月 19 日付　書状　佐賀県立図書館所蔵」
資料「佐賀県の事業と人物　伊丹彦次郎項　同図書館所蔵」
文右衛門の嫡男、弥太郎が明治 25 年「佐賀県農会」の幹事に就任している。この件からも文右衛門が弥太郎への伊丹一族実権の移譲を計っていたと筆者は推察し、文右衛門引退の機運があったと思われる。

前述の論文「筑後川下流の近代化産業遺産群探査と考察」と併せ推論すると下記の文に集約できる。

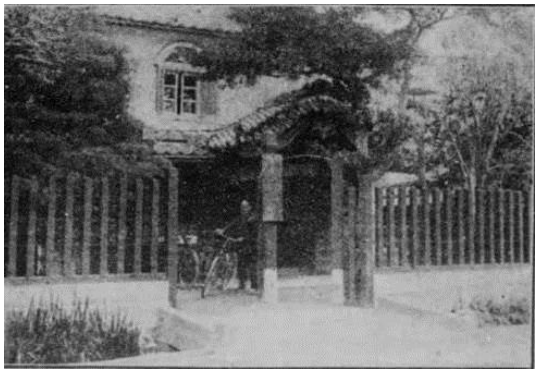
「銀行、鉄道、土木分野の佐賀近代化の先駆　　伊丹文右衛門」

「海運、造船分野の佐賀近代化の先駆　　深川嘉一郎」

「明治期、佐賀市の表玄関　　九州鉄道佐賀駅」

「明治期、佐賀市の真の玄関　　筑後川若津港」

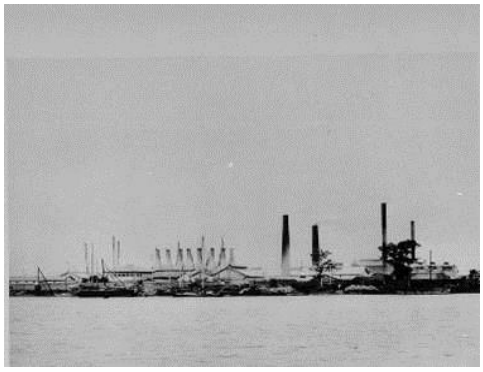
・栄銀行本店　　佐賀近代インフラの発祥地　　佐賀市　旧清和高校跡に位置する



・筑後川導流堤　明治 23 年完成
鉄道車両を積載した船舶もここを通過した

・深川家若津別邸と大東丸　大正時代　個人蔵

・佐賀セメント諸富工場　明治 44 年頃　本社　大正時代　佐賀市柳町　旧美川眼科診療所



写真資料２

・旧古賀銀行本店　　明治末期　完成間もない頃　　古賀家　写真資料提供

当時は現存建物の約半分

・長崎松島炭鉱　大正時代の積出港の風景　貨物船は深川家「深川汽船」　古賀家写真資料提供

写真資料３

・佐賀市道祖元町（さやのもとまち）　専修寺本堂と山門

・伊丹家累代の墓所　　山門くぐり左側　別格の墓所

深川家本宅、伊丹家本宅は専修寺の隣接した所である。

第２章　伊丹弥太郎と他の実業家達との共同事業

明治26年家督相続をした伊丹弥太郎の事業の特性は共同事業であると筆者は考察する。本業の金融業「栄銀行」は伊丹家の単独事業とし、鉄道事業を核とした事業展開はその全てがリスク分散を考慮したものと調査研究での結論である。勿論、先代文右衛門と小西新右衛門との関係は弥太郎が引き継いだのである。

第１節　伊丹弥太郎の前期事業展開　　明治39年以前

伊丹弥太郎は慶応2年（1866年）生まれである。彼も岳父と変わらぬ浄土真宗西本願寺の直参門徒を継承した信者である。事業哲学として浄土真宗の教義を貫いた明治・大正・昭和の傑人である。
前章と同様に弥太郎の主たる年譜を記述する。

表３

明治期	項目	備考
26年	・弥太郎　栄銀行頭取就任	
28年	・真宗信徒生命保険設立　取締役就任 本社京都	社長　小西新右衛門 日本貯金銀行　小西頭取
29年	・佐賀貯蓄銀行設立　取締役就任 ・京都　企業銀行　監査役就任	 真宗系私立銀行
30年	・佐賀セメント設立　取締役就任	深川家共同事業
31年	・佐賀農工銀行　取締役就任	
33年	・佐賀県金庫事務　栄銀行 ・九州鉄道　監査役就任 ・真宗信徒生命　小西社長来県 ・仁比山別邸　九年庵築庭	32年阪神電気鉄道設立 小西・小曽根発起人
39年	・広瀧水力電気設立　取締役就任 ・11代小西新右衛門　没	福澤桃介資本参加 12代新右衛門継承
40年	・神戸　帝国水産　取締役就任	社長小曽根喜一郎
43年	・九州電気設立　取締役就任	
45年	・九州電燈鉄道　社長就任	松永安左衛門役員参加
大正期		
2年	・佐賀セメント　佐賀市蓮池町移転 ・九州電燈鉄道関係会社合同	古賀家三井との 共同事業「松島炭鉱」
4年	・筑紫電気軌道設立　社長就任	後二代目九州鉄道　改称
5年	・九州電化工業　社長就任	
6年	・唐津築港　監査役就任	
7年	・貴族院議員選出 ・九州土地建物　取締役就任 ・九州電気製鋼　取締役就任	
8年	・九州産業鉄道　監査役就任	

11 年	・東邦電力設立　社長就任 ・佐賀セメント　豊国セメントへ吸収	
13 年	・九州鉄道設立　社長就任	筑紫電気軌道改称
14 年	・栄銀行　唐津銀行へ吸収	
昭和期		
5 年	・東邦電力　社長退任	取締役降格
8 年	・伊丹弥太郎　没	

年譜より伊丹弥太郎の事業展開が判明する、明治 39 年以前は銀行・保険の金融業それ以降は鉄道、電力業である。前半は佐賀中心、後半は福岡・神戸・東京と東進する。しかも深川家の喜次郎は神戸・大阪で海外航路開拓の深川汽船業務を拡大、古賀家は二代古賀善兵衛の妹婿、「長崎松島炭鉱」社長古賀春一が炭鉱業の東進を計る。古賀春一は大正期より大きく動き出す、本業の炭鉱業以外に長崎電燈鉄道、九州電燈鉄道への多額の出資である。筆者は調査研究の中で古賀銀行が大正末期に休業に追込まれる最大の要因は「古賀春一の炭鉱業の不振」であり、その背景には常磐炭田「大日本炭鉱(株)」不振での三井物産の資金引揚と推測する。東京での古賀春一は「気鋭の砿業家」と紹介されており、佐賀より長崎の実業界出身との知名度が高いのである。彼は長崎市内に居を構えた。

資料「神戸海運五十年史　神戸海運業組合編　1923 年」
資料「大日本実業家名鑑上巻　実業之世界社編　1919 年」
資料「1920 年代における常磐炭鉱企業の停滞
論文　長廣利崇著　2006 年」

他の御三家の動向はこの程度で弥太郎の年譜に戻ることとする。

明治 26 年、弥太郎は父文右衛門の死後に関西での実業家との接触が大きくなる。
特に「11 代小西新右衛門」と神戸財閥と呼ばれた「小曽根喜一郎」である。
小曽根は小西と共に阪神電鉄に創成期より関わり、九州電気軌道の重鎮となる。
（注：西日本鉄道は九州電気軌道の継承会社）
明治 28 年、社長小西新右衛門、専務取締役高井幸三、取締役芝原嘉兵衛、鎌田勝太郎、豊永長吉、伊丹弥太郎、高木善兵衛、牛谷寅太郎により「真宗信徒生命保険株式会社」が京都で設立した。全国規模の仏教系生命保険会社の誕生であり、九州代表の弥太郎 28 歳でのお披露目である。この機会は弥太郎が事業展開の指針とし、関西実業家との動向と交流を持った大きな節目である。日清戦争も本年 4 月に終息し戦後好景気になり、弥太郎は将来の光を見たであろう。

ここで伊丹文右衛門、弥太郎親子が影響を受けた 11 代小西新右衛門の紹介をする。

「本名　小西新右衛門業茂（11 代新右衛門）1851～1906 年　摂津国伊丹　生」
明治 11 年 11 代目を襲名、実業家、武道家、数寄者の顔を持つ明治時代関西実業界の重鎮であり、本業は「銘酒白雪の小西酒造」である。数寄者とは本業とは別に「茶の湯」「能」等に造詣が深く、文化的に教養の高い実業家である。
日本酒醸造、関西の鉄道事業、銀行業に大きく関わり、日本古来の武道のために小西家道場「修武館」を一般公開し「大日本武徳会」の設立発起人にもなる。
資料「Fujiyama NET　小西酒造(株)　Web 版　伊丹歴史探訪」

このように弥太郎の金融機関関与の動きは新右衛門に追随し佐賀で展開している。
明治 30 年、深川家を中心に佐賀県内最大の近代的工場、佐賀セメント(株)が創設される。本社与賀町栄銀行構内であり工場は東川副村諸富で、最大時 700 名の職員を抱え、明治 35 年の役員には深川文十、伊丹弥太郎両専務のほか深川・伊丹家の役員による共同事業であった。設立時株主には大隈重信、佐野常民、佐賀の主要実業家が資金を拠出し明治 31 年工場開業となった。この頃はデ・レイケ導流堤の機能で 2,000 総頓の船舶も若津・諸富津の「大川口」川港に入港でき、遠く沖縄や中国大連まで製品出荷することとなった。　（この時、大隈は農商務省大臣で事業認可）

明治 33 年、この年は真宗信徒生命の小西新右衛門社長が来県し、顧客の接待、挨拶等文書が佐賀県立図書館所蔵資料にある。前述したように小西社長は数寄者としても見識があり、恐らくこの年に始まった伊丹家仁比山別邸の茶室、庭園造りにアドバイスを与えたと推定している。別邸の建築は文右衛門、茶室・庭園は弥太郎と区別する案も観光資源の「九年庵」資料に取り入れる検討を頂きたいと筆者は考えている。
（庭園は久留米誓行寺阿和尚の作庭と言われている。）
また、九州鉄道の監査役として弥太郎は伊丹家として文右衛門没 7 年後に復帰する。

明治 39 年、伊丹家に大きな影響を与えた小西新右衛門が他界し、その事業は 12 代に継承される。（伊丹家からの弔電が資料として残る）

第２節　伊丹弥太郎の後期事業展開　　明治 39 年以後

明治 39 年、佐賀の主要実業家による本格的水力発電所が広瀧水力電気(株)として設立される。その際のことは佐賀市史「第三巻」明治後期の産業に詳しい、しかしながら既述の内容に「松永安左衛門、福澤桃介など中央財界有力人の支援を得て・・・・・」とあるが筆者は異論がある。福澤桃介翁伝にはこのような回想記述「博多の太田清蔵が広瀧水力の新株を持ち込んだので引受ってやった・・・・佐賀へ行ってみると、社長は旧鍋島藩の元家老（中野致明）で人品良き人であり、他の重役の牟田万次郎・伊丹弥太郎も立派なひとであったので、安心して払込んだ・・」がある。
これを考慮すると当時の福澤桃介、松永安左衛門は佐賀の実業家に会って電力業に進出したのである、当時福澤も松永も評判は良いとは言えなかったので逆に佐賀の実業家との共同事業で信用を得たと筆者は考察している。
広瀧の水力発電所は現在も稼働し、過去の電力業界変遷史にある吸収合併後、九州電力にとって「広瀧水力電気(株)」と伊丹弥太郎のその後の事業活動は「一つの源流」である。（広瀧発電所は深川造船所の鉄管、佐賀セメントの製品使用、請負は主に松尾組）
また、小城出身の「中野初子（なかのはつね）」大実業家「野口遵（のぐちしたがう）」もこの発電所事業に関わる。伊丹家別邸も隣接しており多用途に使用されたであろう。

明治 40 年、弥太郎は神戸財閥の小曽根喜一郎と組み「帝国水産(株)」を設立する。
この両者の出会いは恐らく 11 代小西新右衛門の紹介で阪神電気鉄道の重鎮小曽根と知り合ったと推察している。小曽根は北九州の九州電気軌道(株)の筆頭株主であり役員にも明治 41 年就任している。この二人の関係は九州地区電気鉄道における路線の勢力分布にも影響を与えることとなる。
興味深い事実、長崎電気軌道(株)が大正 3 年に設立される際、取締役に小曽根喜一郎と古賀家古賀春一の名前がある。三井物産との古賀家の共同事業「松島炭鉱」は大正２年開始である。（古賀春一は二代古賀善兵衛の妹婿、善兵衛の妻は深川嘉一郎の外孫）

明治 43 年、九州電気(株)が佐賀市で創立される、これは武雄電燈と唐津電燈を合併し

広瀧水力電気の営業譲渡を受けたものである。
明治 45 年、火力発電の供給のみであった博多電燈軌道と水力の九州電気両社が合併し九州電燈鉄道(株)が発足、社長に伊丹弥太郎が就任したのである。この年より北部九州の私鉄電気鉄道事業に大きく足を踏み出すのである。また、松永安左衛門もこの電気鉄道業に本格参画することとなるが、筆者は神戸財閥の小曽根喜一郎と伊丹弥太郎の関係があってこそ大きく発展したと考察する。後世の鉄道史の中では松永安左衛門の露出多く、弥太郎が陰に隠れてしまっていると思われ誠に残念である。

第 3 節　伊丹弥太郎の大正期事業展開　　大正から昭和

明治が終わり大正時代に時は移る。
大正 2 年、佐賀セメントは栄銀行本店与賀町から柳町へ移転する。この頃の役員構成を見ると社長伊丹弥太郎、深川・伊丹家の取締役に加え唐津大島小太郎、佐賀古賀善兵衛が監査役として就任している。新本社建物は古賀善兵衛頭取の古賀銀行本店より西５０ｍの所である。

大正 4 年、後の九州鉄道久留米線になる筑紫電気軌道が設立され弥太郎が社長就任、福岡地区の 2 電気鉄道会社の社長となる。この頃は弥太郎トップ、安左衛門サブのコンビによる事業展開であった。大正期における弥太郎の公私に渡る拠点の資料が判明していない、福岡天神地区が事業拠点であるが、多忙な彼の住居は何処であったろう謎である。会合で博多水茶屋「常盤館」を使用したことは判明している。

この頃、九州地区私鉄電車の合併、吸収、合同が多発する、そこで少し明確にする。

「新聞記事による九州電燈鉄道(株)と九州鉄道(株)の沿革」

・福岡日々新聞 1913.9.13（大正２年）
九州電燈鉄道(株)社長伊丹弥太郎、佐世保電気(株)福澤桃介、唐津軌道(株)社長松永安左衛門、七山水力電気(株)社長大島小太郎、大諫電燈(株)社長鶴田小太郎、糸島電燈(株)田中徳次郎の六会社合併、仮契約をし九州電燈鉄道(株)を存続会社とす。

・福岡日々新聞 1913.12.19（大正 2 年）
九州電燈鉄道(株)と九州水力電気(株)と合併申合書、大正 3 年 4 月末日実行。

・大阪朝日新聞九州版 1919.8.5(大正 8 年)
九州電燈鉄道(株)経営の福博電気軌道と九州水力電気(株)経営の博多電気軌道(株)の市内電車争覇戦、・・・市民は将来両社が合併し・・・希望す。

・中外商業新報 1922.1.7(大正 11 年)
関西電気(株)は九州電燈鉄道(株)を合併し九州電燈鉄道(株)は解散す。

・大阪朝日新聞九州版 1922.6.18(大正 11 年)
福岡久留米間の電車敷設を計画せる筑紫電気軌道(株)は十五日の定期総会で愈々九州鉄道(株)と改称する事となった。従来九州地方で九鉄と言えば・・・・・
九州電燈鉄道(株)の略称として・・・・

資料「神戸大学図書館データベース」

九州電燈鉄道の株主、役員構成を見てみることとする。

表４　大正６年５月末現在　九州電燈鉄道(株)　大株主抜粋一覧「九州諸会社実勢」

順	株数	株主名	県名	備考　役職は当社
1	20,500	福澤桃介	東京	相談役
2	15,680	古賀春一	長崎	取締役　古賀家
3	8,000	東京海上保険	東京	
4	6,034	松永安左衛門	大阪	常務
5	5,962	川崎銀行	東京	
6	5,842	千代田生命	東京	
7	4,966	岡部忠太郎	長崎	
9	4,864	伊丹弥太郎	佐賀	社長　伊丹家
10	4,714	大同生命	大阪	
11	4,600	唐津銀行	佐賀	大島小太郎頭取
12	4,002	原庫次郎	福岡	取締役
13	4,000	岩崎久弥	東京	三菱社主
13	4,000	大島小太郎	佐賀	取締役
13	4,000	川添清磨	東京	
・ ・ ・	・ ・ ・		・ ・ ・	
18	2,596	森伸一	佐賀	
22	2,300	蒲地駒作	同	深川家縁戚
33	1,840	深川喜次郎	同	監査役　深川家
36	1,700	唐津貯蓄銀行	同	
37	1,660	中野致明	同	東京在住　広瀧水力
42	1,360	吉田恒男	・	
47	1,258	草場猪之吉	・	
52	1,086	田上源太郎	・	伊丹家
53	1,084	橋本栄治	・	
60	1,012	池田キミ	・	
62	1,000	河村藤四郎	・	
63	1,000	吉田久太郎	・	監査役
68	1,000	古賀ウタ	・	古賀家
71	970	福田慶四郎	・	
75	930	森田友一	・	
76	920	池田市五郎	・	
82	800	呼子銀行	・	
85	780	重松英一	・	
88	750	蒲原民太郎	・	
89	750	栄銀行	・	伊丹家
90	748	橋本素彦	・	
94	684	藤山ミス	同	

百位以内抜粋

大株主構成で福澤・松永派 26,000 株、伊丹・古賀・大島の佐賀派 29,000 株から推察しても佐賀県の資本が非常に多く投資されている。このことは佐賀の資金が福岡へ流入していたことを物語る。鉄道事業に懸ける弥太郎の姿を見て、多くの佐賀の実業家市民が支援したであろう。特に唐津大島小太郎は弥太郎と親交が深かったと思われる。大正７年、弥太郎は佐賀県選出の貴族院議員に当選し国会議員活動がはじまる。この

時の拠点は伊丹家によると麹町と聞く。翌 8 年に彼は北九州炭砿地帯の九州産業鉄道の監査役にも就任している。

大正 11 年、弥太郎の事業展開は大きな転換期を迎える、電気事業と電鉄事業に分離し西日本で最大級の電力会社「東邦電力」が設立され初代社長になる。同 13 年には九州電燈鉄道解散、筑紫電気軌道改称により「九州鉄道(株)」が設立され、引き続き社長就任となる。国会議員としての全国区での活動、東邦電力社長としての実業界活動、公共交通機関のトップとしての九州での重責、順風満帆の事業展開である。

「私鉄九州鉄道に執念を燃やした伊丹弥太郎」

九州の名称を冠とした明治大正時代の私有鉄道を挙げると下記のようになる。
表 5

鉄道会社名	設立年	伊丹家役員	備考
九州鉄道（初代）	明治 20 年	取締役　伊丹文右衛門 監査役　伊丹弥太郎	明治 41 年鉄道院国有化
九州電気軌道	明治 41 年		関西資本による私鉄 西日本鉄道への継承会社
九州電燈鉄道	明治 45 年	社長　　伊丹弥太郎	
九州産業鉄道	大正　8 年	監査役　伊丹弥太郎	麻生一族炭鉱用鉄道
九州鉄道（二代）	大正 13 年	社長　　伊丹弥太郎	西鉄大牟田線に継承

以上の様に伊丹家は九州電気軌道以外の九州と名前の付く鉄道に関わりがある。
実現はしていないが大牟田・柳川・大川～（筑後川橋梁）～諸富・佐賀間の私有鉄道が各商業会議所内で検討されている。その仮称は「九州中央鉄道」と呼ばれたのである。

資料　「大佐賀市論　中島秀雄編　1919 年」

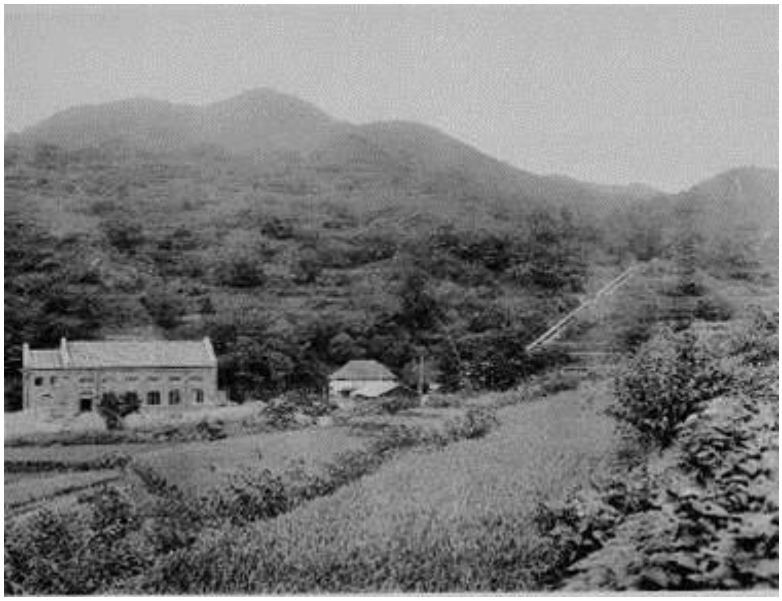
しかし、佐賀財閥と言われた実業家の御三家に大きな負の影が襲った、あの「侯爵大隈重信」が大正 11 年 1 月 10 日逝去したのである。国民的大政治家大隈侯は御三家の事業活動に大きな影響と支援をしていた。また、世界大戦後不況と関東大震災不況が追い打ちをかけ、大正 13 年 8 月、深川家深川造船所の休業、大正 15 年 5 月古賀家古賀銀行の休業に至ることとなった。
深川・古賀両家による業績不振は当然伊丹家にも及びつつあったが弥太郎は大島小太郎の唐津銀行への栄銀行吸収合併の道を選択し、大正 14 年 5 月対処したのである。
吸収合併時、伊丹一族の唐津銀行転籍に対する大島小太郎への謝辞が残っている。

その後、昭和 5 年東邦電力の社長退任までの伊丹家の債権処理がどのような形で実行されたのか不明である。盟友松永安左衛門は伊丹弥太郎を東邦電力役員として最後まで遇したことも記述しておかねばなるまい。

三方良し　　「自分良し・相手良し・世間良し」

江戸中期から続く「近江商人の哲学」、この実業の哲学を伊丹文右衛門弥太郎親子は実践したのではないか、山城国・摂津国・近江国は隣接した地域である。もしも、この哲学が伊丹家の家訓であれば伊丹出身の近江商人の流れとなる。しかも、近江商人には浄土真宗の熱心な門徒が多いと聞く・・・・・・。
謎は尽きない・・・・・・。

・広瀧水力発電所　伊丹家仁比山別邸九年庵の上流　明治末期　　近代デジタルライブラリー



・佐賀商工人　七傑　大正 10 年頃　写真の人物の多くは九州電燈鉄道の役員及び大口出資者

古賀家写真提供

後列　　吉田久太郎　　古賀善兵衛　　深川喜次郎

前列　　福田慶四郎　　大島小太郎　　伊丹弥太郎　　高取伊好

（表４を参照されたい、高取伊好の後継者高取盛が大正９年には大株主となる古賀春一持株を引き継いだ形跡がある。）

写真資料２

・九州電燈鉄道(株)傘下の福博電気軌道　大川市若津深川造船所にて製造

大正期　個人所蔵

・大川の木工技術により木骨木造車両製造中

九州電燈鉄道　本社　福岡市天神　　資料提供　西日本鉄道株式会社　広報室

終章

昭和 8 年 10 月 3 日　伊丹弥太郎　逝去。

昭和 17 年　九州電気軌道が九州鉄道等 4 社を合併、9 月 22 日西日本鉄道に社名変更
昭和 26 年 5 月 1 日　九州電力株式会社創立

弥太郎の共同事業の真骨頂が「西日本鉄道」、「九州電力」として現在も継承、また紅葉の名勝「九年庵」として伊丹家別邸へ訪問客の絶えないことは誠に感慨深いものがある。

最後に、確認資料とした「佐賀新聞に見る　佐賀近代史年表　明治編上・下」の編集にあたられた佐賀近代史研究会の諸氏に敬意と謝辞を表したい。

平成 27 年 6 月 9 日　筆者誕生日にて出稿